

I will increase average life expectancy in this world.

この世界の平均寿命を
頑張っ**て伸ばします。**

3

まさちち

masachichi

院長先生

孤児院を営む、とっても優しい女性。

ブルース

誰からも恐れられる裏社会の有名な。怖い……

ビッグホーン

大きくて凶暴な魔物。意外と人懐っこい？

スミー

ブルースの相棒。無口で斬ることが好き。甘党。

キャロライン

ヒデノブのもとを訪れたお嬢様の冒険者。ヒーラー道を極めたらしい。

ミイさん

とある事情で足を悪くしてしまった異国の少女。

ミラ

エルフの少女で、ヒデの一番弟子。左目にライフミストというスキルを持つ。

ヒデノブ

本作の主人公。手に入れた回復魔法と診断スキルで、この世界の平均寿命を伸ばすべく奮闘する。

主な登場人物

characters



俺、ヒデこと田中英信は、二人の女神様から回復魔法と診断スキルをもらい、異世界アルデンドの平均寿命を伸ばすために転生した。

転生してからは、冒険者ギルドに診療所を開設したり、怪我人の治療をしたり、毎日大変だったよ。でも、そのおかげで孤児のゲン、トラン、ハルナ、ミラと出会えたんだ。ゲンとトランとハルナは冒険者の道を選んで、ミラは回復師である俺の一番弟子になったんだよね。

最近では、元貴族でBランク冒険者の、キャロラインさんという美人さんも俺に弟子入りしてくれたっけ。今は本人の希望で、キャリーさんと呼んでいる。

それと、薬師のポールさんとも知り合ったんだよね。実は以前、腰を悪くした患者さんを治療したときに、湿布薬があれば良いなと思っていただけで、なかなか実現できずにいた。でも、ポールさんがびったりの魔法薬を作ってくれたおかげで、湿布製作の目処が立って良かったよ。

さらに俺は、大勢の人々に湿布を使ってほしいと思って、薬を量産するための工場を探すことにしたんだ。そして見つけたのが、スラム街にある廃工場。ここを活用できれば、建設のコストを省けるしスラムの人々の働き口も用意できる。まさに一石二鳥なんだけど……スラム街のほとんどの土地は、ブルースさんという、この街の裏社会でちょっとした有名人の縄張りになっているみたい。

そんなこんなで、どうしようかなーと考えながら歩いているとき、俺があまり会いたくないと思っていた人に声をかけられた。

だって、その人は昨日、俺を殺そうとしてきた人なのだから……

1 甘味

それは、湿布薬のことでポールさんと話をするため、ミフと一緒に街を歩いている途中のことだった。

「君、ヒデくんだったよね？」

威圧感のある低い声を聞いて、俺の身体が勝手に震えた。

昨日の光景が脳内にフラッシュバックする。昨日、俺はこの声の主に斬りかかれたのだ。たしか、名前はスミーさんだったつけ？ ブルースさんの用心棒をしていたはず。

ヤバイ、と思って反射的に隣にいるミフを抱えて逃げだそうしたら――

「あ、あの、ご、ごめんなさい」

広場のほうから子供の怯えた声が聞こえてきた。

見ると、ならず者のような風体をした三人の男が、小さな女の子を囲んで、蹴飛ばそうとしている。

俺は咄嗟に女の子の前に飛び出る。

自分でも信じられないくらいスピードが出たせいで、女の子の手前で躓き、ならず者たちに頭から突っ込んでしまった。

三人のならず者と俺を含めた四人が、まとめて転んでしまった団子状態になる。

「デメー、何しやがる？ 死にてえのか？」

いち早く立ち上がったならず者の一人が、俺の首根っこを掴んで引き起こしながら凄んできた。

「イテテテ、え？ いや、そんな気はなかったんですが、そこで躓いちゃいまして。ハハ」

その気迫に圧倒され、腰を低くして返答する俺。

いやいや、地球にいたときだって喧嘩なんかしたことないし、街中で普通に帯剣している人がいるような世界でカッコよく啖喰なんか切れないよ。

「デメー、ぶっ殺してやる。アーン？」

そう言っただけで女の子を蹴ろうとしていた奴が起き上がり、俺に近づいてきた。

ならず者たちが、怯えている女の子に背を向ける格好になったので、今のうちに逃げるように、

俺は女の子へ目で合図を送る。

女の子は迷っているような素振りを見せたけど、ミフがその女の子の手を引いて遠くに連れていってくれた。さすがミフだ。あとはこいつらを追い払えば万事解決だな。

と言っただけで、戦ったりはしませんよ？ だって俺に喧嘩は無理だし。何とか宥めて穏便に帰ってもらおう。

「まあ、まあ、ここは落ち着いて、ねえ？　小さな女の子にケガなんかさせたら格好悪いよ、お兄さんたち」

俺が優しい声でそう言うと、三人組はキョロキョロと辺りを見回し、先ほどよりさらに険しい顔になった。

「テメーのせいで、あのガキがいなくなっちゃったじゃねえか。アーン？」

「小さな女の子じゃなきゃケガさせてもいいんだよな？　アーン？」

「テメーで憂さを晴らそうじゃねーか。アーン？」

三人組は、変ちくりんな語尾をつけて威嚇してくる。

「ブ、ブブ……」

俺は下を向いて必死に笑いをこらえていた。

だってこいつらときたら……三人とも同じ顔で最後にアーンとかつけてさ、もう一度それやられたら絶対我慢できないよ。

俺が腹筋に力を入れて笑わないように震えていると――

「こいつ震えてやがる。さっきの威勢はどうしたんだよ。アーン？」

あ、ダメだ。もう我慢できない。

「ブッ！　アハハハハ！　ゴメン勘弁して！」

俺がいきなり笑いだしたので、ポカンとする三人組。やがて一人が我に返り、怒鳴り声を上げる。
「テ、テメー、俺たちを舐めやがって！」

男は手を振りかぶってきた。

ああ、これは殴られるな。

そう思って目を瞑って身構えたが、いつまで経っても衝撃が来ない。

目を開けると、いつの間にか無精ひげを生やした男が俺の隣にいて、俺に殴りかかろうとしていたならず者の手を掴んでいた。ついさっき俺に声をかけてきたスミーさんだ。

スミーさんが俺に向かって言う。

「ちよつとゴメンね。話があるんだけど」

スミーさんに腕を掴まれたならず者が懸命にもがくが、スミーさんの手はビクともしない。スミーさんの腕、ならず者の半分くらいの太さしかないのに、スゴイなこの人。

そんなふうに感心していたら、別のならず者がスミーさんの顔を凝視している。

「あ、あ、ああ、や、やべー。スミーだ。ブルースファミリーの掃除屋スミーだ。に、逃げろー」
そう言うと、その男は仲間のことなど放っておいて一目散に逃げだす。もう一人のならず者もあとを追うようにその場を走り去り、腕を掴まれていた者も、スミーさんが手を離すと大慌てで逃げ去った。

スミーさんは走り去る男たちを不思議そうに見ていたが、不意にこちらに目を向けて尋ねてくる。

「僕のこと、覚えてる？」

その聞き方がどことなく可愛らしかったので、俺がさっきまで感じていた悪寒はすっかりなくなってしまう。

「はい。助けてくれてありがとうございます」
俺の言葉にキョトンとするスミーさん。

「ん、助ける？ さっきの奴らのこと？ ヒデ君が笑ってたから遊んでるのかと思った。ああ、そんなことよりお願いがあるんだけどさ。昨日ブルース君に使ったあの光って病気を治すでしょ？」
あの光っていうのは、回復魔法のヒールのことだろう。俺がうなずくと、スミーさんは続ける。
「ブルース君、あれから身体の調子が良いみたいで咳が出てないんだよ」
「そうですか、それは良かった」

昨日、ブルースさんが酷い咳をしていたところを偶然見かけて治療したんだよね。その途中でスミーさんに斬られかけたわけだけど、何にせよ、病気が治ったようで本当に良かった。

スミーさんが飄々とした調子で尋ねてくる。

「それでさ、その光って怪我也治せるの？」

「ん？ 治せますよ。どこか怪我したんですか？」

「いや、僕じゃないよ。一緒に来てもらっていい？ すぐそのパン屋さんだけだよ」
強面のスミーさんからパン屋さんという言葉聞いて、ちょっと意外に感じた俺は聞き返してしまふ。

「パン屋さん？」

「うん、腕を怪我しちゃったみたいで、パン生地が作れなくてお休みしてるんだよ。ヒデ君の魔法で治してあげてくれないかな」

「治すのは構いませんが、なんでスミーさんがパン屋さんの治療なんて頼むんですか？」

「え、だって、あの店のあんパンが好きだからね。あそのパン、すごく美味いんだよ」

スミーさんが力を込めて「美味しい」と言うので、俺は思わず食欲をそられてしまった。

「……それは、ぜひ食べてみたいですね」

「ヒデ君が怪我を治してくれば、明日には食べられるよ」

「スミーさん、パン屋さんはどこです？ 案内してくれますか？」

「こっちだよ」

さっそくスミーさんが俺に背を向けて歩き出したので、俺は黙って付いていく。

今のスミーさんのはのんびりとしていて敵意なんて感じられない。もしかしたら前みたいに突然、なんでもないような顔で俺を斬ってくるかもしれない。けれど、あんパンが食べたいからパン屋の主人を治してくれと言うこの人を、悪い人だと思えることはできなかった。

「このパン屋さんだよ」

しばらくすると、スミーさんが立ち止まって指を差す。その先を見ると、店の前で掃除をしている年配の女性がいた。多分この女性がパン屋の主人の奥さんなんだと思う。

俺はその女性に近付いて声をかける。

「こんにちは、このお店のご主人が腕を怪我してしまったと聞いたんですが……」

「そうなんだよ、聞いとくれよまったく。うちの旦那、うっかりどこかに腕をぶつけたんだと。そ

れで怪我をしてパン生地がこねられなくなるなんて、恥ずかしくってしょうがないよ……」

奥さんはしばらく愚痴を言っていたが、俺の背後にいるスミーさんに気が付いて声をかける。

「あら、さっきの常連さん。ごめんねえ、せっかく買いに来てくれたのに」

スミーさんが早く用件を切り出せとばかりに背中をグイグイ押してきた。どうしたんだろ？ 自分で言えばいいのに。

何故かだんまりを決め込んでいるスミーさんに代わって、俺が事情を説明する。

「俺、冒険者ギルドで回復師をやってるんですよ。良かったらご主人の怪我を治療しましょうか、奥さん？」

「そりゃあ、願ってもない話だけど……十分なお礼はできませんよ？」

申し訳なさそうにする奥さんに、俺は治療の金額を伝える。

「あ、いつもは治ったら銀貨一枚をいただいています」

「え、そんなに安くていいんですか？」

「はい、皆さんそれでやってもらってますから」

「今、旦那を連れてくるから待ってて」

奥さんは驚きながらもそう言うのと、店の中に引っ込んだ。しばらくして、奥さんと一緒に年配の男性が出てくる。この人がご主人か。

ご主人がぶっきらぼうに言う。

「あんたかい、腕を治してくれるっていう回復師さんって」

「そうですよ」

「すまねえ、よろしく頼むぜ」

「診せてもらいますね」

俺は異世界の女神様——俺はチョロイン女神様と呼んでいるけど——からもらった診断スキルを発動して、ご主人の容態をたしかめることにした。すぐに診断スキルがご主人の症状を教えてくれる。

『右腕の骨にひびが入っていますね』

《うん、ありがとう》

俺は診断スキルにお礼を告げると、奥さんには聞こえないようにご主人の耳に口を近付ける。

「……ご主人、結構飲んだでしょ？」

俺がこっそり言うのと、ご主人がひるんだ様子を見せた。

「う、なんでそんなことまでわかるんだよ？」

「腕の骨にひびが入るほど勢い良くぶつけるなんて……飲みすぎですよ」

そう注意したら、ご主人は急に小声になって俺に囁きかける。

「わ、わかったよ、このことは内緒にしてくれ。母ちゃんに知られたら禁酒させられちゃう」

「フフ、わかりました。では、治療しますね」

骨くっ付け、くっ付いて丈夫になれ。

念を込めてヒールをかけると、ご主人の右腕がほんのりと光った。

光が収まったところで俺はご主人に告げる。

「はい、終わりましたよ。ゆっくり動かしてみてください」

「おう、もう終わったのか？ 腕があったかくて気持ち良かったけど……お、おお、力を入れても痛くねえよ」

「良かった、大丈夫なようです。明日また来ますから、完全に治つてるようでしたら銀貨一枚を用意しておいてください」

そう言つて帰ろうとすると、老夫婦が俺を押しとどめた。

「待て待て、銀貨一枚くらい今払うからよ」

「そうだよ、今持つてくるから待つていてくれよ」

奥さんが急いで店の中に入つていき、すぐに戻つてきた。何故か大きな紙袋を抱えている。

「はいよ、銀貨一枚。あと、このパンは昨日の残り物なんだけど、お札に持つていきなさい。家で食べておくれよ」

奥さんに紙袋を手渡された。中を覗くと、大小様々なパンがぎっしりと入っている。

「わ、こんなにたくさん？ ありがとうございます」

「いいんだよ。常連さんも、明日はあんパン、用意しとくからね」

無言でうなずくスミーさん。なんでさっきから喋らないんだ、この人。

「すみません、こんなにいただいちゃつて」

俺が礼を言つと、奥さんは朗らかに笑つた。

「ハハ、気にしないでくださいな。残り物で申し訳ないくらいさ」

「いえ、ありがとうございます、今度はちゃんと買いに来ますね」

そうして老夫婦に別れを告げ、俺とスミーさんはたくさんさんのパンが入った大きな紙袋を抱えながら、噴水がある商店街の中央までやつてきた。

いつの間にか戻つてきていたミラが、俺に声をかける。

「あ、ヒデ兄師匠、こんなところにいた」

どうやら俺を探していたみたいだね。俺はしゃがみ込んでミラの頭を撫でて、ミラが逃がしてくれた女の子のことを尋ねる。

「さっきの子は大丈夫だった？」

「うん、一緒にお家まで帰つたよ。おつかいの帰りにあの男の人たちにぶつかっちゃつて、怒鳴られてたんだって」

「そうなんだ。もうアイツらも悪さはしないんじゃないかな。メチャクチャビビってたし」

まあビビらせたのはスミーさんなんだけど。

それから俺とミラは、二人で噴水の前にあるベンチに腰かける。スミーさんはなぜかちよつと離れたところに立つていた。

俺はミラに菓子パンを渡すと、スミーさんに声をかける。

「スミーさんも食べるでしょ？ こっちに来て食べようよ。あんパンはないみたいだけど」
するとスミーさんはすぐやってきて、先ほどまでとは打って変わって喋りだした。

「あそこのあんパンはすぐに売りきれちゃうんだよ。でもそのパン、ヒデ君がもらったものなの、僕がいたでいいの？」

「いや、こんなに食べきれないですから」

俺がそう言うと、スミーさんがキョロキョロと周りを見る。

「じゃあ、ちょっと待ってて」

そう言うと、飲み物を売っている店に走っていった。

ミラが、不思議そうに話しかけてくる。

「ヒデ兄師匠、あの人って本当にこの前の悪い人なの？」

「うーん、躊躇なく俺を斬ろうとしたのもスミーさんの一面だし、今のほんわかした感じもスミーさんの一面なんだよ。きつと、どっちも合わせてスミーさんなんじゃないかな」

それっぽいこと言ってみたんだけど、ミラは混乱してしまったらしい。

「よくわかんない」

「ハハハ、信じたいほうを信じればいいよ」

「うん、それならわかる」

それからしばらくミラと話をしていたら、スミーさんがカップのジュースを三個持って戻ってきた。

「はい、パンのお礼」

手渡されたジュースを受け取る。

「おまけでもらったパンなのに、ありがとうございます。いただきますね」

そして三人でベンチに座り、並んでパンを食べ始めた。

俺はパンを頬張りながらスミーさんに尋ねてみる。

「甘い物好きなんですね？」

「そうだね、甘いのは好きかも」

「じゃあ、近くにある屋台で売ってる、ハチミツがかかったパンって食べたことありますか？」

あのパン、前にみんなで食べたんだけど、美味しかったんだよなあ。ハチミツがすごく濃厚で。

「あー、うん。あそこのパンは美味しいけど、ハチミツで手がベトベトになっちゃうのが嫌だね」

たしかにそうかも。ともかく、スミーさんは悪い人じゃなさそうだな。よし、スミーさんに、ブルースさんへの伝言をお願いしちゃう。

「……ところでスミーさん。スラムに使われなくなった材木工場があるのってわかります？」

「うーん……あ、あの広い場所にあるやつか。うん、わかるよ」

「実は今度そこを買い取って、薬の工場を始めようかと思ってるんですよ」

「ふーん、ヒデ君らしいね、薬の工場っていうのが」

「それで、ブルースさんにそのことを伝えたいてもらえます？」

「ブルース君に？」

スミーさんは一瞬考える素振りを見せたが、すぐにうなずく。

「うん、いいよ。ヒデ君にはパン屋さんの借りがあるし」

「ありがとうございます」

そこで、俺はふと気になったことを口にする。

「そういえば、ブルースさんのことを君付けで呼んでるんですね」

「子供の頃からそう呼んでるからね」

「ということは、幼馴染？」

「そうだよ、同じ孤児院にいたんだ……あ、これ言っちゃいけないんだった。今の聞かなかったことにしてね」

そう言うと、スミーさんはゆっくり立ち上がった。

「さて、帰るかな。ご馳走様でした。じゃあねヒデ君」

「はい、さっきの話、お願いしますね」

俺が念を押すと、スミーさんはうなずいて、のんびりと歩いて帰っていった。

◇ ◇ ◇

スミーさんと別れた俺とミラは、当初の予定通りポールさんに工場の話をするため、薬屋へ向

かった。

店に着くと、ポールさんの孫娘であるラウラが店先で遊んでいるのを見つけた。

ラウラはこちらに気がつき、元気良く走ってくる。

「ん？ 今日は何、いないのか？」

キョロキョロ周りを見回すラウラ。そういえばこの間から、ラウラはゲンたちと仲良くなったんだっけ。特にゲンのことが気になっている様子だったな。

今日は俺たちだけだと伝えると、ラウラは少し残念そうにしたものの、ミラと一緒に店の中へ入っていった。部屋で遊ぶのかな？

一人で店に入ると、ポールさんの義理の娘であるモニカさんが出迎えてくれた。

「あら、ヒデさんいらっしやい。お義父さんはいつもの部屋にいるわよ」

俺は急に思いついて、先ほどパン屋さんからもらった紙袋をモニカさんに手渡す。

「これ、向こうのパン屋さんからパンをたくさんもらったので、おすそわけです」

「あら、あのパン屋さん、今日お休みじゃなかった？」

そう言って首を傾げるモニカさん。俺はさっきあった出来事を説明する。

「はい、ご主人が怪我してたらしくて。それでついさっき治してあげたら、パンをいっぱいくれたんです」

「まあ、それで休みだったのね。ありがとう、いただきますね……って言ってもうちは三人だから、そんなには食べられないけどね」

三人つていうのはポールさん、モニカさん、ラウラのことかな。モニカさんの旦那さんには放浪癖があるみたいで、現在音信不通だそう。いつか再会できるといいんだけど……

モニカさんに頭を下げて、ポールさんの部屋へ向かう。ノックをしてから中に入ると、ポールさんは安楽椅子に座って読書をしていた。ポールさんが顔を上げ、声をかけてくる。

「おお、ヒデ君か。今日はどうした？」

「はい、実は……」

俺はポールさんの作った湿布薬を量産しようとしていること、そしてそのために工場を買い取ろうとしていることを説明した。

ポールさんは一通り聞き終わると、朗らかに笑う。

「フオフオ、そこまで考えておったのか、さすがじゃのう」

「まだ、大雑把すぎて何も決まっていなくてすけどね。ちなみに薬の量産って可能だと思いますか？」

「フム……まず、薬の材料はギルドで買ってもそこまで高くはないはずじゃ。調合も少し練習すればできるじゃろうし、大丈夫じゃろ」

なるほど、なんとかなりそうだな。あとは、生産の監督役がいればありがたいんだけど……

「ポールさんの知り合いに、専属で工場に勤めてくれるような人っていますかね？ 薬の品質を管理できそうな方がいれば、ぜひお願いしたいんですが」

「弟子は何人かおるが、みんな独り立ちしておるしのう。まあ少し当たってみるかの」

またもやポールさんのお世話になってしまった。そうそう、ポールさんには薬を作ったロイヤリティを支払わなきゃいけないんだった。

「それと、こっちの流儀を知らないのて聞いちゃいますけど、ポールさんにはどれくらい払えばいいんですか？」

ポールさんはキョトンとしていた。

「ん？ ワシに何を払うのじゃ？」

「いえ、この薬を作ったのはポールさんじゃないですか」

「そうじゃが、別に秘伝の薬でもないしのう」

「こう、特許みたいなのってないんですか？ マネしたら罰金とか？」

「ん？ 王家や貴族の紋章、お金を偽造すれば死刑じゃがのう」

なんか、いまいち話がポールさんに伝わってないな。

どう説明しようかと考えていたら、ポールさんが柔らかく微笑む。

「フオフオ、ヒデ君が言わんとするところはわかっておるよ、じゃがそれは必要なことじゃきっぱりと言うポールさん。」

これ以上話すのは逆に失礼だな。そう思って俺はひとまずうなづく。

「わかりました、その件はまた今度。まあ、場所と人の確保とかが先ですかね」
それからしばらく、ポールさんと打ち合わせをするのだった。

2 密談

ポールさんの店から帰ってきた次の日、俺はスラムにある材木工場を買い取るために商人ギルドへやってきていた。

受付の男性に工場を買い取りたいと伝えると、すぐに係の人を呼んでくれる。その人に手伝ってもらいながら、なんとかスラムにある材木工場の買収手続きを済ませた。

場所は確保できたし、あとはブルースさんに許可をもらうだけだ。事後承諾^{しうたたく}だけど。

数日後、ギルドの酒場でミラ、ゲン、トラン、ハルナ、それからキャリーさんと一緒に少し遅めの昼ご飯を食べていたら、いつも賑^{にぎ}わっているギルドが急に静まり返った。

どうしたのかと思つて周囲を見回すと、キャリーさんが玄関のほうを凝視^{ぎんし}しているのに気が付く。その視線を追うと、玄関にブルースさんとスミーさんが立っていた。まあ十中八九、俺絡みだよな。

「ブルースさん、スミーさん、こっちだよ」

俺の呼びかけに気が付いたらしく、ブルースさんたちはこちらに歩いてくる。

「こんにちは」

「こんにちは、ヒデ君」

スミーさんが俺の挨拶に応えたのを見て、ブルースさんは何故か驚愕^{きやうがく}の表情を浮かべた。

「はあ？ スミーお前、ヒデと話せるのか？」

ブルースさんにそう問われ、スミーさんは黙つてうなずいている。ブルースさんの言っている意味がわからないんだけど、深く突っ込まないほうが良いのかな。

……と思いつつ、俺はスミーさんに声をかける。

「嫌だな、挨拶くらいしますよね。あ、この間はジュースご馳走様でした」

「いやいや、あのときは僕もパンをもらったからね」

「あ、昨日、あんパン買いに行きましたよ。甘すぎず絶妙な味で美味しかったです」

「僕も昨日、買いに行ったよ」

そうそう、昨日、あんパンを買いに行ったんだよね。スミーさんも行ったんだ。

俺とスミーさんのやり取りを見てしばらく固まっていたブルースさんが、やっと口を開く。

「……ずいぶん仲良くなつてたんだな」

「うん、あれ？ そうだね、こないだ会ったときからだね、なんでだろ？」

そのとき服の袖が引っ張られているのに気が付く。振り返ると、ゲン、トラン、ハルナがジト目で俺を睨んでいた。

「ヒデ兄、いつこの無精ひげのおっちゃんに会ったって？」

「僕たち聞いてないよね、その話？」

「何か言うことがあるはずだよ？」

あ、やべ。スミーさんのことを言うと心配かけちゃうかなーと思って、三人には話してないんだった。

俺はごまかすように三人に言う。

「いや、あの、ねえ、あれ？ 話すの忘れちゃったかなーハ、ハハ」

「お師匠様、暢気のんきすぎますわよ」

キヤリーさんにまで呆れられてしまった……

ブルースさんがそんな俺たちを見てため息をつき、その場の雰囲気を変えるように告げる。

「ハア……まあいい。ところでヒデと話があるんだが……」

「あ、はい、じゃあ診療所に行きますか？」

「……いや、ここでいいだろ。個室に入れる雰囲気でもないしな」

そう言っただけでブルースさんは周囲に目をやる。

俺もブルースさんに倣なまって周りを見ると、ママさんや他の冒険者たちがブルースさんたちを警戒して身構えていた。ブルースさんって本当に裏社会の有名な人なんだなと思いつつ、俺はギルドのテーブルを指差す。

「じゃあ、そこで話しましょう。スミーさん、このグレプっていう果物のジュース、甘くて美味しいよ。飲みますか？」

「うーん、でも工作中だしな」

そう言いつつも、甘い物に目がないスミーさんはチラッとブルースさんを見た。ブルースさんは

またため息をついて言う。

「いいから、ここに座ってオーダーしろ」

「え、いいの？ じゃあヒデ君、それお願い」

スミーさんが席に着くと、ブルースさんは頭を押さえながら着席した。

俺はブルースさんに陽気に尋ねる。

「ハイハイ、ブルースさんも頼む？」

「……いや、お茶でいい」

「ママさん、グレプのジュースと紅茶を一つずつね」

「……はいはい、ヒデちゃんにかかればどんな危険人物だろうとみんなと同じね」

ママさんがニコニコしながら、注文した飲み物を持ってきてくれた。

ブルースさんたちが飲み物に手をつけるのを待ってから、俺はさつき気になったことを尋ねる。

「ブルースさん、スミーさんが喋ったときなんで驚いてたの？」

「ああ、スミーは基本的に無口なんだよ。口を開くのは仕事のとくと剣を抜いているとき、あとは俺と会話するときだけだ」

そういえば、ならず者から助けてくれたときも俺にしか話しかけていなかったし、パン屋の人とも話してなかったな。いつもはあんな感じなのか。

「でも、スミーさんから俺の伝言は聞いてたんでしょ？ だったら俺がスミーさんと話してたってわかるんじゃないですか？」

「いや、ヒデが黙っているスミーに一方的に伝えてたのかと思ってた」

「いやいや、そんなわけないじゃん。でもまあ、そういう想像をするくらい、スミーさんは普段から喋らないってことか。」

ブルースさんが話題を断ち切るように、身を乗り出して告げる。

「まあいい、そんなことよりヒデ、スラムの工場を買ったな？」

「うん、スミーさんから聞いたと思いますけど、そこを薬の工場にするつもりです」

俺がそう答えると、ブルースさんが懐から四つ折りの大きな羊皮紙を取り出した。テーブルに広げられたそれは、街の地図だった。

「ヒデが買った土地がここで、こちら辺が俺の土地だ」

ブルースさんが地図を指差しながら説明する。スラムの半分くらいがブルースさんの土地らしい。あ、孤児院も含まれてる。

「じゃあ、残り半分の土地は誰のなんですか？」

「こっちは他のならず者勢力と商人ギルドのだ。まあ、そもそも工場は俺の土地じゃないから俺は何も口出ししないが……こんな場所で人が集まるのか？」

「人集めはスラムの中でやるつもりです」

俺の返答を聞いて、ブルースさんは呆れたような表情を浮かべた。

「はあ？ わかってんのか？ スラムの男は大体が怪我人の冒険者崩れだ。使えるのは女子供くらいしかないぞ？ それともまさか、女子供を安い賃金で働かせるとか考えてるんじゃないだろう

な？」

「考えてないですよ、そんなこと。できれば給料は普通より多く出したいけど、そこは儲け次第ですかね。まあ、男の人たちも少しは工場で働いてくれるようになると思います」

「何を言ってるんだ？」

ブルースさんが怪訝そうに尋ねてくる。

俺はブルースさんに、自分の考えを打ち明ける。

「えっと、スラムで治療しようかと思って」

「は？ スラムの人間全員か？」

「まあ、できれば。でも、最初は工場周辺の人たちからかな。で、悪いところがあったら治療して元気になつてもらいます」

「まさかお前、怪我人を治して工場で働かせるつもりじゃないだろうな」
段々理解してもらえてきたみたいだ。俺はさらに続ける。

「希望者にだけお願いするつもりです。また冒険者に戻る人や他の仕事を探す人もいるでしょうし」

「それで、働く奴には普通より高い給料を出す、と……なるほど、金があればスラムから出られるからな。つまり、スラムから出られる人を増やしたいと」

「いや、スラムの環境ごと変えて、スラム自体を住みやすくしたいんです。ゴミを片付けたり、家を建て直したり」

「家を建て直す？ スラムの奴らにそんな金あるわけないだろ」

「たしかにそうなんです、住宅ローンをやってもいいかもって思ってるんです」

「ローン？」

ブルースさんが首を捻る。この世界には住宅ローンの仕組みは普及してないのかな。ざっくり説明しよう。

「えっと、簡単に言えば、家を建て直すためのお金を貸すんですよ」

「スラムの奴らに金を貸すのか？ だが、返済の保証はないぞ」

「ええ、ですからうちの工場で働いてる人限定にしようと思ってるんです。事前に給料から返済分を引いて渡すっていうふうに」

「給料の前借りみたいなもんか」

「そうですね。家を担保にし、もし返せなくなったら、ちょっとひどいかもかもしれませんが家を没収します。でも、人って一度生活水準を上げると、そこから落ちないように頑張るんですよ」

「なるほどなく、よく思いつくそんなこと」

ブルースさんが何度もうなづく。

「まあ、故郷のシステムを持ってきたんですけどね。どうですか？ 一緒に工場やりませんか？」
スラムのことに詳しいブルースさんが手伝ってくれるなら心強い。そう思って提案してみたのだが、ブルースさんは首を横に振った。

「フフ、お前と一緒にやるのは楽しそうだが、やめておこう」

「何か腑に落ちないこととありました？」

そう尋ねると、またもや首を横に振るブルースさん。

「いや、逆だ。そのシステムなら間違いなくうまくいくだろう。だから俺は手を出さない。俺みたいなのが関わると変な噂が立つからな。その代わりに俺は、他の奴らにも絶対に手出しさせないようにしてやる」

なるほど、たしかにブルースさんが関わってるってなったら、みんな怖がって工場で働いてくれなくなるかも。ブルースさんはやっぱり裏社会の人みたいだし。

「わかりました。よろしくお願いします」

俺は深々と頭を下げる。

話が一段落したところで、ブルースさんは俺の隣にいるゲンたちに目を向けた。俺も横目で見ると、ゲンとトランがジッと地図を見てあれこれ話している。男の子はコマゴマしてるの好きだよ。地図を見るのって楽しいし。

「ここがギルドでしょ？」

「うん。じゃあ、こう行って、ここが院だね」

「院って……お前たち、孤児院の子供か？」

ブルースさんが突然ゲンに話しかけた。ゲンはびっくりした様子を見せながらも、素直に答える。
「え、うん、そうだよ」

「そうか、あの暴力女はまだ元気か？」

「え？ 誰のこと？」

「院長先生の奥さんで、髪の毛を後ろで束ねている」

「院長先生の奥さん？ 院長先生は女の人だよ？」

ゲンが不思議そうに言うのと、横で聞いていたトランが代わって答える。

「えっと、前の院長は今の院長先生の旦那さんで、もう亡くなっちゃったんだよ。前に聞いたような気がする」

「……そうか、亡くなったのか……」

ブルースさんがぼつりと呟いた。そういえば、二人は孤児院で育ったってスミーさんが言っていたわけ。あれってあの孤児院のことだったんだ。

「僕たちが入る前みたいだから、よくわかんないけどね。今の院長先生も病氣だったんだけど、ヒデ兄が治してくれたんだよ」

「そうだったのか……ヒデ、お前には返しきれないほどの借りができちゃったな」

ブルースさんがまっすぐ俺を見つめてきた。何だか気恥ずかしくなって、俺は頭を掻きながら答える。

「俺が治してあげたかったから治しただけですよ」

「フフ、まあいい、俺も勝手に借りを返していくぜ」

ブルースさんが右手を出してきた。こちらも右手を差し出したら、その手をグイッと引っ張られる。前のめりによろけると、ブルースさんは左手で俺の背中をガシッと掴んで、耳元で囁いた。

「お母さんを助けてくれてありがとう」

それから二人は席を立った。別れ際、ブルースさんが真剣な顔を俺に向ける。

「ヒデ、お前の敵は俺が必ず潰してやる」

「え？ いやいや、いいですよ、敵とか」

「フフ、じゃあな」

「じゃあね、ヒデ君」

スミーさんはニコニコ笑っている。

「はい。また、甘い物でも食べに行きましょう」

「ハハハ、甘い物か。締まらねえなまったく」

笑いながら去っていくブルースさんたちを、俺は玄関から見えなくなるまで見送った。

あの二人は孤児院を守るために裏の世界に入ったのだろうか。ふとそんな考えが浮かんだ。

3 身内

ブルースさんたちの来訪から数日、ついにゲンたちが冒険者のランクアップ試験を受ける日がやってきた。三人は現在Fランク。試験に合格したらEランクになる。なんでも森に入ってゴブリンを討伐する試験らしいけど、本当に大丈夫なのか……

「みんな、忘れ物とか平気か？ もう一度確認したほうがいいんじゃない？」
ギルドから出発する間際、俺は三人に声をかける。

「ヒデ兄それ何回目だよ？」

「ヒデ兄が行くんじゃないんだから、落ち着いてよ」

ゲンとハルナがうんざりしたように言う。でも、心配なんだからしょうがないじゃん。俺はなおも三人に確認する。

「あ、あの銀でできたペンダントはちゃんとしてるよな？ 俺がランヒールを付呪したやつ。ハルナのは髪飾りだから一目でわかるけど……」

「もう、それもさつき見せたでしょ！」

ハルナが呆れたように言った。たしかに何回も見せてもらった気がする。

そんなやり取りをしていると、三人を引率することになっているキャリーさんが割って入る。

「お師匠様、私が試験官を務めますし、危険はないですわ。ザルドさんも付きますし」

キャリーさんが、隣にいるいかついおっちゃんに目をやる。

このおっちゃんはザルドさんといって、以前俺が治療した患者さんだ。Cランクの冒険者で、その実力は折り紙つき。たしかに、この二人がいれば何があっても大丈夫かな。

「うん、そうだね。二人とも、任せたよ」

俺がそう言うのと、ザルドさんは胸を張って応える。

「まあ、ヒデの秘蔵っ子の晴れ舞台だから用心はするさ。でも、試験の内容はゴブリン討伐でノル

マは一人一匹だ。標的さえ見つかりやすすぐ終わるぜ」

「う、そうなんですけどね」

ふと横を見ると、ミラが少ししょんぼりした様子で立っていた。ミラが三人に話しかける。

「ハルちゃん、みんな、頑張つてね。私は行けなくてゴメンね」

ハルナはミラに向かってにっこりと微笑んで言う。

「もう、昨日も話したでしょ。私たちはミラちゃんに別の道ができて嬉しいんだよ」

ゲンとトランも続く。

「そうだな。冒険者以外に良い仕事があれば一緒に働けたんだけど、俺たちにはこの道しかなかったし」

「ミラに冒険者は無理だろうな」って思ってたところに、ヒデ兄が現れたんだ。それで、ミラに回復師っていう未来ができて、僕たちも嬉しかったんだよ」

ミラがばつと笑顔になる。

「うん、ありがとうみんな。怪我しても生きて戻ってきてね。必ず私が治してあげるから」

「ブツ、ワハハハ、今の、ヒデ兄がよく言ってる言葉だ」

「ハハ、そうだ、ヒデ兄がクエストに向かう冒険者にかける言葉」

「フフフ、そっくりだったよ」

「クスクス、いつも聞いてたからうつっちゃった」

仲良く笑い合う四人。



ミラが別れの挨拶を済ませたようなので、俺も最後にゲンたちに念を押しておく。
「忘れ物ないか？ 怪我しないで帰ってこいよ」

「あれ？ いつもの、怪我しても生きて帰ってきてねって言葉じゃないの？」

「それは友達や患者さん用だよ。み、身内はやっぱり怪我してほしくないから」
自分で言ってるちよつと恥ずかしい。

顔を背^{そむ}けていたら、ゲンが抱きついてきた。

「大丈夫だよ、油断しないよ、兄ちゃん」

続いてトランとハルナもくっ付いてくる。

「僕だって絶対しないよ、兄ちゃん」

「私だって、お兄ちゃん」

お、重い。しかし、ここは踏ん張りどころだと思い、頑張って耐える。

しばらくすると、三人が離れてくれた。

「おう、待ってるから早く帰ってこいよ」

「はい！」

俺が兄貴風を吹かせてカッコ良く決めると、三人は元気な返事してくれた。

なぜかザルドさんが上を向いて鼻をすすっている。

「クッ、年を取ると涙腺^{なみだせん}が緩くなって仕方ねえな。よし、お前ら、サッサとゴブリンを倒して早く戻るぜ」

「はい」

もう行くみたいだね。キャリアさんとゲンたちが俺とミラに出発を告げる。

「ではお師匠様、いつてきますわね」

「いつてきます」

「いつてらっしゃい、怪我しないようにな」

「みんな、頑張つてね」

こうしてゲンたちは森に向かつていった。見えなくなるまで手を振り続けていると、たまに振り返って手をブンブン振ってくれる。

そしてついに、みんなの姿が完全に見えなくなった。目頭が熱くなるのを感じながら、ミラに声をかける。

「さて、中に入ろう。ママさんのどこに行こうか」

「はい」

ギルドに入って酒場に向かう。カウンターに座ると、ママさんがニヤニヤしながら見てきた。

「まったく、ヒデちゃんは心配性なんだから。口うるさい母親みたいだったわよ」

さっきのやり取りをしつかり見られていたらしい。

「う、自覚はあるんですが、言わずにはいられないというか……今初めて、親の気持ちがわかりましたよ」

「ウフフ、親の気持ちね。自分が同じ立場にならないとわからないものよね」

「はあ、もう森に入ったかな？」

「ヒデちゃん……さすがにまだじゃない？ 五分も経ってないわよ」

「え、まだそんなもんなの？ コッソリあとをつけたほうが良かったかな。今なら間に合うかも」

「ヒデちゃんが森に入るほうが危険だわ」

「俺だって、こんな大きな角の生えた魔物を倒したことがあるんだぜ」

「……ホーンラビットみたいな弱い魔物と死闘できる人間のほうが少ないわよ。ほらほら、気持ちが安らぐお茶を淹れてあげるから、静かに待つてなさい。ミラちゃんも」

「はい」

大人しく待つていることにして、ママさんの淹れてくれたお茶をマツタリと味わう。

すると突然、ギルドの玄関から大声が聞こえてきた。

「ここにどんな怪我でも治せるヒーラーがいると聞いたのだが、どいつがそうだ？」

玄関のほうを見ると、派手な鎧を着込んだ残念な感じのイケメンが、謎のポーズを決めて立っていた。

その後ろには、ビキニアーマーを装備した剣士の女性と、露出度の高いミニスカートのローブを着た魔法使いらしき女の子がいる。あんな破廉恥な装備あるんだ、初めて見たぞ。

お茶を飲みながらママさんに話しかける。

「ママさん、何あの残念な奴。絶対自分のことイケメンだと思ってるタイプだよな？」

「あゝ、なかなか言うわねヒデちゃん。でも、たしかにずいぶんと装飾の多い鎧ね。戦闘のときに

邪魔じゃないのかしら？」

「もしかして魔法の鎧とか？」

「ううん、どう見てもただの飾りだわ」

誰も反応してくれないことにイラつきだした残念イケメンは、さらに大声で言う。

「チッ、ここには人間の言葉がわかる奴はいないのか！」

俺はママさんに言う。

「なんかすごい煽^{あほ}ってるよ。ここは荒くれ者の多い冒険者ギルドなのに度胸あるね。腕に自信があるのかな？」

「ううん、どうかしらね。それより、動きがありそうよ」

「ん？ どういうこと？」

「ほら、見ててごらんささい。今席を立ったあの子、こないだCランクになったばかりの子よ」

ママさんに言われた通り見てみると、一人の女性が残念イケメンに近付いていった。それから何か言い争いを始めたみたいだけど、ここからだとは声は聞こえない。しばらく見ていたら、いきなり残念イケメンが女性に殴りかかった。

しかし、女性はパンチを軽くいなして残念イケメンの襟首^{えりくび}を掴み、往復ビンタを食らわせた。殴られるより屈辱^{くつじやく}じゃねそれ？ あ、残念イケメン、なんか涙目でビキニの子に命令してる。

「あゝ、ビキニの子に助けてもらおうとしているみたいね。ヒデちゃん、あの変な男の子はヒデちゃんに用があるみたいだけど、行つてあげないの？」

「え？ なんで俺？」

「だって、なんでも治せるヒーラーって言ってたじゃない」

「でも俺、ヒーラーじゃなくて回復師だし」

「何よそのこだわり。でも、間違いないヒデちゃんの噂を聞いてここへ来たみたいよ」

「んゝ、まあいいか。とりあえず行つてきます」

俺は腰を浮かせて、残念イケメンに向かって声をかける。

「ヒーラーじゃないけど回復師をしている者だったらここにいろよ」

顔を腫^はらして地面に座り込んでいた残念イケメンは立ち上がり、ギロリと俺に目を向ける。

「はあ？ 何屁理屈をこねてるんだ？」

残念イケメンは、文句を言いながら俺が座っているカウンターまで歩いてきた。往復ビンタを食らわせた女の子は席に戻ったみたい。

残念イケメンはママさんを見て「ヒッ、化け物」とかほざいた。気持ちはわかるが、それはNGワードだ。ママさんの顔も引きつってるし。

俺は残念イケメンに話しかける。

「用件を聞く前にちよつといい？ なんで女の子たちにそんな装備をさせてるの？」

ずっと気になっていたんで一応聞いてみた。セクシーなのはいいとしても、戦闘向きじゃなさそうなので。

「答える義理はないが教えてやる。こいつらは俺の奴隸^{どれい}だからだ」

とんでもないこと言うな、コイツ。もう話すのも嫌になつてきたけど、なんとか我慢して会話を続ける。

「えっと、お金で買った、戦闘系の奴隷ってこと？」

「そうだ、脳みその足りないお前にも理解できたか？」

「いちいち暴言を吐いてくるな。この男、見た目だけじゃなくて性格まで残念らしい。」

俺はちよつとムツとして言い返す。

「戦闘させてるなら装備くらいキチンとしてやれよ。初めて見たよ、ビキニアーマーとかミニスカローブとか」

「ふん、貴様には関係ない。余計な口を出すな」

「ハイハイ。まあ、隣のカウンター席、空いてるから座りなよ。立ち話もなんだからさ」

「ああ？　なんで男と隣り合つて座らないとかんのだ？」

「あつそう。じゃあお前は立つたままでいいよ」

俺は残念イケメンのために引いてあげた椅子を元に戻した。

コイツに礼儀とかいらないよね、もう。

「チッ、お前も立てばいいだろうが」

「男と座らないって言い出したのは、お前のほうだろ？　なら俺も勝手にさせてもらう。で、ヒーラーがどうしたって？」

そう言いながら、俺はワザとらしくふんぞり返った。残念イケメンは俺の態度がムカついたらしく、

く、こめかみに青筋を浮かべている。

「チッ、貴様、俺が誰だか知らんのか？」

「その顔、その身体……え、まさかあの超有名な、自分をイケメンだと思つて毎日全裸になつて鏡の前で二時間みっちりポーズの練習をしている全裸先輩ですか？」

俺が小馬鹿にしたようにそう言うと、ブツ、と周りで聞き耳を立てていた連中が噴き出した。残念イケメンの後ろに立つていた仲間の女の子たちも、口元を押さえて肩を震わせている。

「貴様、おちよくっているのか？　二時間もやっていない」

やってはいるのかよ。もう面倒だから話を進めちゃおう。

「まあいいや誰でも。俺はヒデだ、よろしくしたくないが、よろしくな」

「なんと無礼な男だ。まあいい、俺の名は………ガイだ」

「それ、偽名だろ？」

「……な、何を言っている。偽名のわけあるはずがないだろ、馬鹿めが」
変な間があつたから適当に言つてみたら、なんかめっちゃ動揺してる。

いい機会だから、ここでこいつに説教してやろう。

「まあ、名前なんてどうでもいいや。話を戻すけど、仲間を大事にしないとダメだ。戦闘で二人に何かあつたら君、死んじゃうよ？」

「え？　何故、俺が死ぬのだ？」

俺の言葉にキョトンとする残念イケメン。

だめだ、こいつ何もわかってない。

「いやいや、こんな紙装備のままモンスターの攻撃とか受けたら絶対怪我するじゃん。それで二人が戦えなくなったらどうすんの？」

「そのときは俺様が戦う」

「さっき女の子に往復ビンタされたくらい弱いのに？」

「……………」

残念イケメンが押し黙ってしまった。見た目と性格に加えて、頭まで残念とは恐れ入ったよ。

「え、まさか考えてなかったの？ パねえっす全裸先輩！ ……あと、これは忠告だけど、ギルドで喧嘩は売らないほうが良いよ。冒険者ってみんなで助け合って情報を共有して生きていくんだから、悪い噂はあつという間に広まる。一匹狼を気取るのはいいけど、自分がもつともっと強くなつてからにしないさいね」

俺がちょっぴり悪乗りして畳みかけるように言うと、残念イケメンは下を向いてしまった。それから、絞り出すように何事かを口にする。

「……………さい」

「ん？ 何？」

「うるさい、うるさい！」

うわ、残念イケメンが爆発した。

顔を真っ赤にして言い立ててくる。

「お前なんかパパに言いつけてこの街にいらなくしてやる!! 僕のパパは侯爵様なんだぞバーカ、バーカ! 死刑にしてやるからな!」

そして、涙目になってギルドから飛び出していった。残念イケメンの仲間の二人の女の子は慌ててそのあとを追う。

「……言いすぎちゃったかな？」

頭を掻いていると、ママさんがクスクスと笑う。

「ウフフ、ヒデちゃん、化け物って言われた私のために怒ってくれたのかしら？」

「……そんなわけではないです」

「ウフフ、まあいいわ、ありがとう。でも大丈夫？ あんな戦闘奴隷を買えるくらいのお金持ちを怒らせて。侯爵とか言ってたけど」

「う、今さら心配になってきた」

でも、済んだことを悩んでも仕方ないよね。俺は気を取り直して、ママさんにおやつを注文するのだった。

◇ ◇ ◇

あとで聞いた話だが、あのガイという残念イケメンは本当に侯爵の息子だったそうだ。

父親の名前は、どこかで聞いたことがあるような名の、デブルッチとかいうらしい。デブルッチ

家は絶大な権力を持っていたんだけど、つい先日、国への反逆罪で捕まり、没落したんだって。そんなこんなでガイ君も行方知れずとなり、復讐にやってくることはなかったと。やっぱり、悪いことをすると罰が当たるんだね。」

4 ランクアップ

残念イケメンのガイ君がギルドから走り去ってから数時間経った。それにもかかわらず、ゲンたちは一向に帰ってこない。

「ママさん、そろそろかな？」

「……まだ昼前よ。さすがにそんなに早くには帰ってこないでしょ」

「えー、そんだけしか経ってないの？」

時間が過ぎるの遅くない？ あゝもー、暇潰しにすることもないし。

俺は誰に言うでもなく呟く。

「ジグソーパズルとかロジックとかがあればな」

「何そのジグソーとかロジックって？」

「故郷にあったゲーム。パソコンがあれば一番いいんだけどね。でも、そもそも電気がないしな」

眉間にしわを寄せるママさん。そしてミラのほうに顔を向ける。

「ミラちゃん、ヒデちゃんの言ってることわかる？」

「えっとね、ヒデ兄師匠、たまによくわからないこと言うの」

「ふーん、ミラちゃんも大変ね？」

「クスクス。でも、ヒデ兄師匠を見ると幸せな気分になるよ」

「あ、それはわかるわ。ヒデちゃんは優しいからね」

何やらママさんとミラがブツブツ言っているけど、気にしない。

「ロジックは無理でも、ジグソーパズルならこの世界でもなんとか再現できるかな……でも俺が手作りするのは無理だし……ムムム」

などと独り言を言っていたら、ママさんに声をかけられる。

「ヒデちゃん、後ろ」

「ん？ 後ろ？」

振り向くと、衛兵が立っていた。あ、この人はゲイルさんといって、以前目の治療をしてあげた人だ。

「こんにちは、ゲイルさん。その後、目の状態はどうですか？」

「おう、絶好調だよ。そんなことより嫌な噂を聞いたんだが」

そうやってゲイルさんは表情を曇らせた。

「噂？ 何それ」

「えーっと、ヒデさんがブルースと手を組んで、この街を牛耳るつもりだった」
「……ああ、その話か」

ブルースさんが心配していた通りになってしまったかと思い頭を抱えそうになると、ゲイルさんがさらに怪訝そうな顔をする。

「ん？ まさか本当なのか？」

「ああいや、全然違います。今度、俺が商売を始めるんですよ」

「商売？ ヤバイやつか？」

なおも問いただしてくるゲイルさん。あんまり心配かけたくないし、ちゃんと事情を説明しておこう。

「まっとうな商売ですよ。心配なら商人ギルドに確認してもらっても構いません。で、その商売する場所がブルースさんの土地の近くだったから、ブルースさんに挨拶ただけです。ブルースさんは俺の仕事には手を出さないって話になってますから」

「ふむ、そうなのか」

ゲイルさんがうなずく。これで納得してくれたとは思っただけど、こんなに早くブルースさんの噂が流れてくるなんて、気になるな。

「ところでその話、誰から聞いたんですか？」

「ん？ ドリーっていう事情通のおっさんからだが……」

勘だけど、そいつ怪しい気がするぞ。

「その人についてもしかして、ブルースさんに不利な情報だけをよく仕入れてきたり、特定の人たちを擁護したりしてませんか？」

「言われてみれば……まさか……」

ゲイルさんはしばらくうつむいてブツブツ言っていたが、やがて顔を上げる。

「ヒデさん、ちょっと用ができたから帰るよ。ヒデさんの噂については了解した。ご協力感謝します」

「いえいえ、まあ、これは俺の独り言なので聞かなくてもいいんですが、その人の身边を洗ったほうが良いかもですね」

「ハハハ、じゃあまた」

ゲイルさんが手を振って去っていった。様子を見守っていたママさんが問いかけてくる。

「ちよっとヒデちゃん、そのドリーっていう人が怪しいって考えてるの？」

「まあ、どうでしょうね。違ったとしても、ブルースさんの情報を流してる奴はいるだろうし、衛兵が動くことでビビるだろうからね。少しでも抑止できれば良いかなって思ってる……」

と言ってみたら、ママさんがなぜかニヤニヤしている。

「ウフフ、ヒデちゃん、友達の悪口言われて怒ってるんでしょ？」

「別に」

そもそもブルースさんが友達っていうのも違う気がするんだけどな。ママさんは相変わらずニヤニヤしていた。

「ヒデちゃんが怒つてるときって必ず誰かのためなもの」
「だから、怒ってないです」

◇ ◇ ◇

日が傾いて空が赤くなってきた。クエストを終えた冒険者もちらはらと戻ってきている。
「ゲンたち、まだかな？」

「時間的にはそろそろ帰ってくる頃ね」

ギルドのドアが開くたびに玄関のほうを見て、ゲンたちじゃないのを確認して、がっかりしてため息をつく。そんなことを繰り返していたら、酒場で飲んでる冒険者たちの話し声が聞こえてきた。

「おい、今日森で大物のモンスターが出たって話、聞いたか？」

「え、知らない。それって退治したのか？」

「そこまではわかんないよ」

大物のモンスターと聞いて、俺は血の気が引くのを感じた。俺はママさんとミラに尋ねる。

「……二人とも、今の聞いた？」

「心配ないわよ、キャロラインちゃんとザルドと一緒に رفتるんでしょ？」

「キャリーちゃんがいれば、どんなのが出たって平気だよ」

たしかにキャリーさんがいれば安心かな……

「そ、そうだよね、大丈夫だよね」

「そうよ、どっしり構えてなさい」

「う、うん………だめだ。やっぱり、ちょっと話を聞いてくる！」

心配で座ってられなくて、話を聞きに冒険者たちのところへ行き、さっそく尋ねる。

「お疲れ様、森に大物が出たんだって？」

「お、ヒデさんお疲れ。まあ大物が出たとしても、この辺りじゃせいぜいCランクのモンスターだよ。そういえば、チビどもは今日試験か。ゴブリンみたいな雑魚モンスターは隠れちゃうから、獲物が見つからなくて四苦八苦してるかもな」

「……そ、そうなのか。それで帰ってくるのが遅いの？」

「いやいや、まだ時間的に普通だよ」

冒険者たちが笑っているが、そう言われても心配でたまらない。そのまま玄関まで行って外に顔を出すと……おつ、遠くのほうにゲンたちが見えた！

俺は急いで中に入り、ママさんの前ですっきり冷めたお茶を飲む格好をする。

「どうしたの？ 突然走って戻ってきて」

ママさんが眉をひそめて聞いてくるが、俺は澄ました顔で答える。

「ん？ 何が？ さっきからこうしてドシツと構えてたけど」

「はあ？」

そのとき、ドアが勢い良く開いて、ゲンたちが入ってきた。

「「ただいま、今戻ったよ」」

診療所に行こうとしているみんなをカウンターから呼び止める。

「おい、こっちこっち。お帰り、ずいぶん早かったね。まあ、キャリアさんたちがいたから全然心配しなかったけど」

「「「はっ」」」

俺の言葉に、ギルドにいた他の冒険者たちが一斉に噴き出した。

ゲンが不審そうに周りを見る。

「ん？ どうしたのみんな？」

「さあ、飲みすぎたんじゃないか？ それより怪我はないな？ よし、じゃあ受付で手続きを済ませといて。クエストの話はここで聞くからな」

「「はっ」」

元気に走って受付に行く三人。それを見送っていると、ママさんが口を開いた。

「ヒデちゃん、走って戻ってきたのは、このためだったのね」

「フフフ、だってさ、どっしり構えてたほうが子供たちも安心するでしょ」

そう言っていて笑うと、ママさんも笑顔になる。

「今日のヒデちゃん、どこかイライラしてるって思ってたけど、チビちゃんたちのことが心配で余裕がなかったからなのね」

「いやいや、何言ってるの。余裕綽々^{よゆうちやくさ}だったでしょう？」

「今日のどの部分を見てそう言えるのよ、今日初めて笑顔を見たわよ」

「え、そうだったかな？ そんなことより子供たちにグレプのジュースをお願いね。ミラも飲むだろ？」

「うん、ありがとうヒデ兄師匠」

ミラが笑顔でうなずいた。

「ハイハイ、今持ってくるわよ。まったくヒデちゃんにこんなに心配してもらえるなんて、チビちゃんたちに嫉妬^{しつと}しちゃうわ」

「ハハハ、俺はいつもあらゆる人を気にかけてるんですから、全ての人間に嫉妬しないといけないんですよ？」

「調子出てきたみたいね〜ヒデちゃん」

ジュースの用意をするため、カウンターの奥に引つ込むママさん。それと入れ替わりで子供たちが駆け寄ってきた。

「「ヒデ兄見て見て！」」

三人がギルドカードを我先にと見せてくる。

どれどれ……

「おお、ちゃんとEランクになってるな〜、おめでとう。三人とも頑張ったな」

「「「ありがとう！」」」